# 野辺の送り

夜明けとともに、トンビが鳴く。トンビの子がそれをまねる。呼応し合って賑やかだ。

夏の夜の短さを人生のはかなさに譬えて、高浜虚子は、「明易や花鳥諷詠南無阿弥陀」と詠んだ。

一茶（法名）は通り過ぎる風に、「涼しやな弥陀成仏の此の方は」と受け止めた。そして、千代尼（法名・素園）は、「月も見て我はこの世をかしく哉」を辞世の句として往かれた。「かしく哉」は「あなかしこ」と同じく、ああ、勿体ないことです、である。

これらの句には、弥陀の願いである一人ひとりを救い取らずにはおかぬぞ、に出会えたやさしさが凝縮されている。先人たちは、受け継いだ願いを珠玉の一言に残して、浄土へ還って行かれた。

まして、身近な人は、どれほど尊く深い願いを、この私にかけ続けておられたことであろうか。おかげさまで、あなたが、この世で、私に会ってくださいました。南無阿弥陀仏。

（珠洲市・真宗大谷派西勝寺住職、西山郷史）